慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	北京大学図書館蔵宋元版解題史部
Sub Title	
Author	尾崎, 康(Ozaki, Yasushi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1995
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.30 (1995.) ,p.71- 105
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000030-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

北京大学図書館蔵宋元版解題　史部

尾崎　康

例　言

一　この稿は、北京大学図書館所蔵の宋元版のうち、史部に属する本を網羅的に著録するものである。宋元版としての選択は、同館編の北京大学図書館蔵蔵李氏書目（一九五六年刊）と北京大学図書館蔵善本書目（一九五八年刊）に拠った。この両目録に宋・元版とされている本は、明版と審定されたものも原則的に取上げた。

李盛鐸旧蔵書については、冊数の次に「李」字を付した。

一　正史類については、北京大学図書館蔵宋元版史部正史類解題として、中国典籍与文化論叢第一輯（一九九三年　中華書局刊）に発表したから、ここには書目の形式で列挙し、北京図書館古籍善本書目に倣って版式等を注記するに止めた。

一　同版本が日本に現在する本については、日本現在宋元版解題　史部（上・下）（斯道文庫論集第二七・二八輯　一九九三・四年）に詳述したから、基本的な事項以外、重複する記述はできるだけ省略し、「前解題（上・下）」を参照していただくこととして、その頁数を記入した。

正　史　類

史記一三〇巻　漢司馬遷撰　南朝宋裴駰集解　〔南宋前期　建安〕刊（巻五～七補配〔北宋〕刊本・巻一〇〇

第一葉補配元至元二五年彭寅翁崇道精舍刊本）　二〇冊　李

左右双辺　一三～一四行　二四～二七字・小字双行二七～三三字

線黒口　〔北宋〕刊小字本　左右双辺　一四行　二七字　白口　楊氏

海源閣四経四史斎史記之第三

同　残一六巻（存巻一一～一四・四八・四九・五八～六〇・一一〇・一一三～一一六・一二八・一二九）　南朝宋裴駰集解　唐司馬貞索隠　唐張守節正義　元至元二五年（一二八八）彭寅翁崇道精舍刊　七冊　李

左右双辺　一〇行　二一字　線黒口

漢書零巻（存巻一下第二～一五・一七・一八葉）　漢班固撰　唐顔師古注　〔南宋初期〕両淮江東転運司刊　一冊　李

〔南宋中期・元〕遞修

左右双辺　九行　一六字　線黒口

同　一〇〇巻　宋慶元二年（一一九六）建安黄善夫・劉元起刊　八〇冊　李

左右双辺　一〇行　一八字　線黒口

同　零本（存巻五尾二葉・巻六・七）　元大徳九年（一三〇五）太平路儒学刊　一冊

双辺　一〇行　二二字　線黒口

後漢書一二〇巻　南朝宋范曄撰　唐李賢注　（志）晋司馬彪撰　梁劉昭注　〔宋慶元四年（一一九八）〕建安黄善夫刊（志巻一～一四・伝巻三〇下～三五・八〇補写）　六〇冊　李

双辺　一〇行　一八字　線黒口

同　（欠巻三四～三九・四四～四九）　元大徳九年（一三〇五）寧国路儒学刊　三六冊　李

双辺　一〇行　二二字　白口

三国志残本（存四四巻）　晋陳寿撰　南朝宋裴松之注

〔南宋前期〕衢州刊〔南宋中期・元・明〕遞修　九冊　李

同版二種の取合本

A　巻二三・二四・四六・五二・六二・六五　至〔明弘治〕遞修

B　巻三～一五　至明嘉靖一〇年遞修

左右双辺　一〇行　一九字　線黒口

又　残本（存呉書二〇巻）　至明正徳一〇年遞修　五冊

又　六五巻　至明嘉靖一〇年遞修　二〇冊　李

又　残本（存巻二七～六五）　至明万暦五年遞修　一〇冊　李

晋書一三〇巻音義三巻　唐房玄齢等奉勅編　（音義）唐何超撰　〔元　浙〕刊明正徳一〇・嘉靖二・九・一〇年遞修　四〇冊　李

左右双辺　一〇行　二〇字　線黒口

又　残本（存巻一～五九・八五・一三〇・音義三巻）　至明嘉靖一〇年遞修　二〇冊　李

又　一三〇巻音義三巻　至明万暦七年遞修　四〇冊　李

同　一三〇巻（欠巻三八）音義三巻　〔元〕覆南宋中期建刊本　八〇冊　李

左右双辺　一〇行　一九・二〇字　白口

又　零本（存巻六六～六八・六九（首尾欠））　一冊

宋書一〇〇巻　梁沈約撰　〔南宋前期　浙〕刊〔南宋中期・元・明〕遞修　明万暦初南監印本　三〇冊　李

左右双辺　九行　一八字　白口

南斉書五九巻　梁蕭子顕撰　〔南宋前期　浙〕刊〔南宋中期・元・明〕遞修　明万暦初南監印本　三〇冊　李

左右双辺　九行　一八字　白口

陳書三六巻　唐姚思廉等奉勅撰　〔南宋前期　浙〕刊〔南宋中期・元・明〕遞修　明万暦初南監印本

左右双辺　九行　一八字　白口　六冊　李

魏書一一四巻　北斉魏収撰　〔南宋前期　浙〕刊〔南宋中期・元〕至明嘉靖一〇年遞修　明万暦初南監印本　四〇冊　李

左右双辺　九行　一八字　白口

又　残本（存巻四六～八八）　〔明嘉靖後半〕印　一〇冊　李

北斉書五〇巻　唐李百薬等奉勅撰　〔南宋前期　浙〕刊〔南宋中期・元〕至明嘉靖一〇年遞修　〔嘉靖中〕印　八冊　李

左右双辺　九行　一八字　白口

周書五〇巻　唐令狐徳棻等奉勅撰　〔南宋前期　浙〕刊〔南宋中期・元〕至明嘉靖一〇年遞修　〔嘉靖中〕印　二四冊

左右双辺　九行　一八字　白口

又　八冊　李

又　一〇冊　李

又　明万暦初南監印本　一〇冊　李

隋書八五巻　唐魏徵等奉勅撰　元大徳中饒州路儒学刊〔明初〕・至嘉靖一二年遞修本と〔元後期〕覆饒州路儒学刊本の混配　二〇冊　李

双辺　一〇行　二二字　緑黒口

又　明万暦初南監印本　二〇冊　李

又　残本（存巻六～一二・二四～三五）　六冊　李

南史八〇巻　唐李延寿撰　元大徳一〇年広徳路儒学刊〔明初〕・至嘉靖一二年遞修本と〔元後期〕覆広徳路

儒学刊本の混配　二〇冊　李

双辺　一〇行　二二字　白口

又　四〇冊　李

又　一六冊　李

又　明万暦初南監印本　二〇冊　李

又　巻六〇～六二補配明万暦一七年～清康熙三九年修本　三一冊　李

北史一〇〇巻　唐李延寿撰　元大徳中信州路儒学刊〔明初〕・至嘉靖一〇年遞修　明万暦初南監印本　三〇冊　李

左右双辺　一〇行　二二字　線黒口

又　零本（存巻三七～三九・四五～四八）　二冊

同　残本（存巻二八～五〇・五四）　八冊　李

左二種の取合本

A　巻四二～五〇　元大徳中信州路儒学刊〔明〕修本

B　巻二八～四一・五四　〔明初覆大徳信州路儒学〕刊〔明〕遞修本

唐書二二五巻　宋欧陽脩・宋祁奉勅撰　元天暦二年（一三二九）覆〔南宋中期〕建安魏仲立宅刊本　明宣徳九・一〇年遞修　一〇〇冊　李

左右双辺　一〇行　一九字　小黒口

又　残本（欠七〇巻）　至明正徳六年遞修　三〇冊

又　零巻（存巻三四首一二葉）　〔明〕修　一冊

同　附唐書釈音二五巻　釈音宋董衡撰　元大徳一一年（一三〇七）建康路儒学刊〔明初〕・成化一八・弘治三・嘉靖八～一〇年遞修（巻二一七上～一二〇補写）　五〇冊　李

左右双辺　一〇行　二二字　白口

又　至万暦四年遞修　万暦初期南監印本　四六冊　李

五代史記零本（存巻四三～四五・四八～五〇）　宋欧陽脩撰　〔南宋〕刊〔元〕修　二冊　李

左右双辺　一二行　二二・三字　白口

同　七四巻　元大徳中鉛山州宗文書院刊〔明初〕修　一二冊　李

左右双辺　一〇行　二二字　線黒口

又　至明嘉靖一〇年遞修　八冊　李

金史一三五巻　元脱脱等奉勅撰　〔明洪武二三年（一三九〇）〕覆元至正五年江浙等処中書省刊本〔明〕修（巻九三～九六補配嘉靖八・九年南京国子監刊本）巻九七～九九補写　二四冊　李

左右双辺・双辺　一〇行　二二字　線黒口

又　零本（存巻一〇八）　一冊

編年類

資治通鑑零本（存巻一二九～一三一・二八二）　宋司馬光撰　〔元覆南宋中期建刊本〕　三冊　李

後補濃紺色表紙（二五・三×一二・五ｾﾝﾁ）、襯装。

本文首題「資治通鑑巻第一百二十九／（低一格）端明殿学士兼翰林侍読学士朝散大夫右諫議大夫充集賢殿集修撰提挙西京崇福宮上柱国河内郡開国侯食邑二千／八佰戸食実封陸佰戸賜紫金袋臣司馬　光奉　勅編集」。

左右双辺（二〇×一二・九ｾﾝﾁ）、一一行、二一字。版心　白口、双黒魚尾の間に「監百廿九　（丁付）」のように題し、上象鼻に字数、下象鼻に刻工名を刻する。耳題「宋孝武」等。刻工名は漢臣のほかは単字で、袁刘肖公明尤祐朱今士元宗。

蔵印は「江東陸氏／書画珍蔵」、「庶庵／渡口人家」、「子々孫々／宝之／　」（陰）、「銭受／之読／書記」（銭謙益）、「籤／後人」「克／庵」（銭曽）、「傅氏／家印」（陰）、「元竟／先生／櫝志／堂物」、「麐嘉／館印」。

すなわち南宋中期建安刊本を元代に覆刻した本で、四部叢刊

本の底本と同版である。拙稿「宋元刊資治通鑑について」（斯道文庫論集第二三輯　一九八八年）では、上海図書館蔵本三種によって詳述しておいた（一九三頁〜）。ところが、右の蔵書印のうち江東陸氏から傅氏までの七印は、上海図書館の三本にもあり、明らかに僚巻であって、いずれも銭謙益（一五八二〜一六六四）、銭曽（一六二九〜一七〇一）と、一七世紀後半には銭氏一族の所蔵であったものである。

しかし北京図書館古籍善本書目に「宋刻本十一行二十一字白口左右双辺」と著録される七部のうち、少くとも第一（二九四巻・配清抄本・一二〇冊）と第三（存九二巻・配其他二種宋刻本・三二冊）はこれと同じ元の覆刻本のはずであるが、原刊本との識別がされていない。中国古籍善本書目においても同様である。両版の差異については、前稿に述べた。

同二九四巻　宋司馬光撰　元胡三省註　〔元〕刊　一四八冊

後補濃紺色絹表紙（二九・八×一九・七㌢）。金鑲玉装（料紙高さ二六・八㌢）。

副紙の表裏に莫友芝とその弟祥之の子の棠の手識があるが、後に掲げる。

王盤の興文署新刊資治通鑑序。その末に「資治通鑑二百九十四巻計九十六冊　意孫「億孫」（印）」（趙懐玉）との墨書がある。次で胡三省の新註資治通鑑序。

本文巻首「資治通鑑巻第一／（低一格）朝散大夫右諫議大夫権御史中丞充理検使上護軍賜紫金魚袋臣司馬光奉／勅編集／（低六格）後学天台胡　三省　音註」。

双辺（三一・三×一四㌢）。一〇行、二四字・注文小字双行。版心　小黒口、双黒魚尾、題「通鑑幾」、上下象鼻に大小字数と刻工名を刻する。刻工名は多く、増訂中国訪書志（三一一頁ほか）や前稿（二一四頁）等に列挙されてあるから、ここには略す。

通鑑釈文弁誤一二巻を欠く。

巻五第二一葉、巻二八第二七・二八葉は補写。前部に朱句点・朱引・圏点が、多くに墨句点が施される。

蔵印は「曹／溶」「潔／躬」、「趙氏／億孫」（趙懐玉）、「莫友芝／図書印」、「章／鈺」、他に「三余斎／図書印」「小酉／斎」「竹／渓」「艸堂」「玉林／清露」（陰）「墨池／清興」（陰）「寛厚／温柔」「光霽／風月」等。

巻頭副紙の莫友芝と莫棠の識語は左の通り。

「元興文署刊本資治通鑑胡注二百九十四巻／装九十六冊出于泰州人家同治乙丑夏曾議／購未就越庚午秋購成矣舎弟以点抹乖刺／促還之尋為江安傅君麗生所収此刻字／体多波折四辺線極粗嘉慶間鄱陽仿／刻亦称善本而未能畢肖也明正嘉（ママ）来是／板帰南監遞有修補此本則元末明初板未／漫漶時印雅丹墨礙同其質地寔極精／美余折閲後猶常々往来于懐麗生略／去　礙且増直售之亦可謂能鑒直者矣／據印記跋尾知経蔵最著者曹氏倦圃馬／氏小玲瓏山館趙氏亦有生斎　礙注此書／原附釈文弁誤十二巻鄱陽覆本有之而／此未備然温公本書固究然無少闕五百年／来万葉鉅編能尓者復幾見哉冬十二／月既望麗生将還属独山莫友芝／書其端

「莫友芝図書印」」

「当時諸老一流賢節食収書不計銭白髪重論頻雪涕（客歳過津門尊甫）／（申甫先生述当日過庭時両家先世金陵往還之迹相対法然）青山無恙久寒煙（先世父塋遵義青田山側）衣冠継武／徴文沢経史貽謀重祖伝四十五年遺墨在滄桑身世祗凄然／　沅叔太史出示　祖庭旧蔵元興署槧資治通鑑注本循覧先／　世父題識敬書長句甲寅九秋初僧莫棠京邸並記「莫月」（印）」。

この本にも王盤の興文署新刊序があって、元刊胡三省音註本はかねてこの序文の通り興文署の刊本といわれてきたが、王国維が元刊本資治通鑑音注跋（観堂集林巻二一）や伝書堂善本書目において、ほぼこれを否定した。中国訪書志はこの両説に疑問があるとし、私も前稿に詳しく検討は行っておいたが、いまだに断定をしかねている。

又　（巻二九三・二九四補写）　八〇冊

後補乳白色表紙（三〇×一八・六チセン）。

新註資治通鑑序があって、本文。

末二巻の補写に続いて、司馬光の上言、進呈列銜、奬諭詔書、元豊八年准尚書省箚子（聖旨下杭州鏤板）列銜、紹興二・三年両浙東路提挙茶塩司の列銜が補写されている。

首一巻に朱筆で句点が打たれている。通鑑釈文弁誤を欠く。

比較的早印で刷りも鮮かであるが、上海図書館蔵本の巻七以下の多くの巻末に胡三省が苦難の編纂過程を書いた記事が刻されているのが、もはや削除されて存在しない。

蔵印は「呉郡／陸氏／蔵書」「全卿」（明陸完）、「汪印／喜荀」（二種）「汪孟慈／蔵書画印」「孟／慈」「江都汪氏／季子祠攷／蔵印記」、「楊紹和／蔵書」「東都楊紹／和鑑蔵金／石画之印」「宋存書室」「海源閣」、「燕京大／学図書／館蔵印」。

又　残本（存巻一・二・一〇～二一・計一四巻）　六冊

後補乳白色表紙（三〇×一八・三㌢）、金鑲玉装（料紙高さ二六・六㌢）。

新註資治通鑑序に次で、本文。

蔵印一が読解不能。

又　零本（存巻一〇五）　一冊

香色覆表紙（二七・六×一七・七㌢）、「謹以此元刊資治通鑑一〇五巻残冊／北大図学専修科以做参攷資料／一九五一年十月四日」と墨書し、上方に「敬贈」、左下方に右横書楕円形で「北京／隆福寺監□大陀／文殿閣書店／一五二号後門」のゴム印を捺す。後補金切箔散青色表紙。金鑲玉装（料紙高さ二五・二㌢）。全三二葉。刷りはかなり良い。

又　零本（存巻二三九（欠第一～四葉表・五葉表）～二四一（欠第二八葉以下））〔元〕刊〔明初〕印　三冊　李

新補群青色表紙（二九・八×一八㌢）、金鑲玉装（料紙高二六・四㌢）。一冊本を一九六五年に改装したという。

蔵印は「麐嘉／館印」「木犀軒／蔵書」。

かなり漫漶が進んでいるが、この巻に明修はない。

又　（存通鑑釈文弁誤一二巻）　至明弘治二年修　八冊

香色表紙（二八・八×一七・二㌢）、金鑲玉装（料紙高さ二七㌢）。

本文巻首「通鑑釈文弁誤巻第一／（低八格）天台　胡　三省　身之」。

補刻葉に、版心上象鼻に「弘治二年／国子監刊」、下象鼻に「監生周和録」と刻する葉がある。

巻末に胡三省の通鑑弁誤後序がある。

蔵印は「王氏／心遠／斎印」、「楊紹和／審定」（右半陰左半陽）「彦合／珎玩」「楊印／承訓」（陰）「柳城楊／承訓鑒／蔵書画印」「宋存書室」「柳城楊／氏宋存書／室珍蔵」「海源／残閣」、「燕京大／学図書／館珍蔵」。楊氏海源閣旧蔵であるが、前揚の八〇冊本は早印であり、この後修本が僚巻であったわけではない。

通鑑地理通釈一四巻　宋王応麟撰　元後至元六年（一三四〇）慶元路儒学刊　明正徳一・二年（一五〇六・

七）修　玉海附刻本　　八冊　李

香色表紙（二六・五×一七・一ｾﾝﾁ）、襯装。

通鑑地理通釈目録。東西魏周斉相攻地名攷、唐三州七関十一州攷、石晋十六州攷が附録。

本文巻首「通鑑地理通釈巻第一／（低一〇格）浚儀王応麟伯厚甫」。左右双辺（二一・八×一二・八ｾﾝﾁ）、一〇行、二一字・注文小字双行。版心　白口、双黒魚尾、題「通釈（釈）巻幾」、上象鼻に字数あるいは補刊年記を、下象鼻にときに刻工名を刻する。補刊年記は正徳元・二年。刻工名は単字が多いが、叔章　翁寵、正徳修葉に胡顒、修葉には版下抄手の監生盛儼、監生易韋経の名がある。

蔵印は「烏程／蔣維／基記」「蔣維／基記」、「咸豊庚申以後収蔵」、「集古斎／珍蔵書／画印記」、「麐嘉／館印」「木犀軒／蔵書」。書録著録。

増修陸状元集百家註資治通鑑節一二〇巻　宋司馬光撰

（欠巻四二～四八・七九～九二）　陸唐老集註

〔元末　建安〕刊　　一三冊　李

仮綴表紙（二三・四×一五・八ｾﾝﾁ）。

首三葉半が欠けて司馬光上表が一葉半存、元豊元年の進呈列銜が附き、温公親節資治通鑑序、柳秘丞外紀序、温公外紀序、通鑑釈文序と続いて、末に「新又新」（鼎形）「桂堂」（爵形）の木記（ともに胴部に右横書）。さらに叙撰十七史人姓氏、叙註十七史人姓氏、陸状元通鑑君臣事実分紀綱目、「増修陸状元集百家註資治通鑑詳節目録／（低八格）会稽陸（隔二格）唐老　集註／（同）建安蔡（同）文子　校正」とある。

首題「増修陸状元集百家註資治通鑑節巻之一」。左右双辺（一八・四×一二・七ｾﾝﾁ）、一四行、二三字・注小字双行。版心　細黒口、双黒魚尾、題「監幾」、上象鼻の大小字数がごく稀に刻され、また刻工名　郄邵　梁三　が巻一八以下に散見される。宋諱欠筆が　玄　匡　貞　恒　桓　慎　敦　に残る。巻一七以下に耳題があり、巻一三以下の眉上に標注が行三字で刻される。巻一七～三五は半葉一三行。巻一三以下の首題は「陸状元集百家註資治通鑑詳節」、巻三六～九〇は「増修陸状元集百家註資治通鑑詳節」である。巻二は通鑑釈例図譜で、第五葉以下に通鑑帝王授受図、歴朝の譜系図、歴代国都地理図、五代諸国僭拠図等がある。

巻四二～四八、七九～九二が欠巻、巻八第一・二〇葉、巻一一八第一・二葉等を欠く。巻一第一葉表の下方一～二行が横に

破損しているが、東京大学東洋文化研究所蔵本も同様で、そこに補写が行われている。

巻一〇六末（唐憲宗元和五年）の一葉が離れ、左下方に「両晋六朝／三唐五代／妙墨之軒」（李氏）の朱印が捺されている。蔵印は「又任／□又」、「木犀軒／蔵書」「李印／盛鐸」（陰）「麐嘉／館印」。

静嘉堂文庫蔵本（完本・三二冊）、東京大学東洋文化研究所蔵本（存巻一～六・一冊）と同版で、「日本現存宋元版解題　史部（上）」に解題してある。

省元林公集註資治通鑑詳節零本（存巻四三）　一冊　李

〔南宋　建安〕刊

後補金切箔散明青緑色表紙（二二・二×一四㌢）、金鑲玉装（料紙高さ一九・五㌢）。

本文首題「省元林公集註資治通鑑詳節巻之四十三／（低一格）晋紀／（低三格）康皇帝　在位二年　寿二十三」。左右双辺（一四・七×一〇㌢）。一三行、二三字・注文小字双行。版心　白口、双黒魚尾、中間に「監四十三已」の題と丁付。殷恒徴桓字欠画。構（第六葉表七行）は避諱ではなかろう。慎敦字は現れないが、同版の上海図書館本は敦字を欠く。それに見合う南宋中期の刊と思われる。耳題がある。書録著録、槧印極精という。

朱句点、朱引、朱圏点を施す。「華氏／以貞」、「木斎／真賞」印。

上海図書館蔵本は存巻二九・三〇（後漢献帝紀中下）の一冊。他に同版本はないようであるが、中国古籍善本書目は北京大学、上海両図書館の蔵本を合せて「存八十一巻　一至九　二十七至四十三　五十至一百二」と著録する。

宋史全文続資治通鑑三六巻　元欠名者撰　三二冊

〔元　建安〕刊

後補黄色艶表紙（二七×一六・九㌢）、襯装。

首に進続資治通鑑長編表があり、「臣壽言」に始って「乾道四年四月日李壽」に終るのは李壽撰といわれる続資治通鑑、あるいは宋史全文資治通鑑のいずれも前集一八巻の首にあるものと同文で、書肆が長編の表としてこれに仮託したものといわれる。次に宋朝玉裔（諸王も少し含めた系図）と宋朝伝授（皇位継承図）、続資治通鑑長編目録、その首に木記四行があって、「宋史通鑑一書見刊行者節略太甚読者不無遺／恨焉本堂今得善本乃名

公所編者前宋已盛行／於世今再綉諸梓与天下士大夫共之誠為有用／之書回視它本大有逕庭具眼者必蒙賞音幸鑑」という。

首題は「宋史全文続資治通鑑巻之一」、撰者の名はない。各巻の首尾題には変化があり、巻六首題に「続」字がなく、巻三〇尾題から巻三三首題までは「増入名儒講義続資治通鑑」で、「義」を「議」につくったり、「長編」の二字を加えた巻があり、巻三四尾題は「増入名儒講義続宋朝通鑑」、巻三五首題は「増入名儒講義続宋資治通鑑」、さらに巻三六の首尾題はそれぞれ「宋史全文続資治通鑑長編」「名儒講義宋資治通鑑」であるごとくである。「宋史全文」の四字はやや大きく、入木されたもののようにみえる。

双辺（一九・九×一三㌢）、一六行、二五～二六字・注文小字双行。版心　小黒口、双黒魚尾の間に題「双監幾」、下象鼻の右半に刻工名を刻する場合がある。刻工名は、呉鳥 鄭賜 景祥 順意 文希 范成 林九 呉友。

本文は干支（年代）を墨囲陰刻して始り、注文は低一格で朱文公、曽鞏政要、富弼講義等と墨囲陰刻して宋儒の評語を載せる。眉上に見出しの語を、また耳題を「太祖建隆元年」のように刻する。巻三〇の尾題の前に木記の匡郭だけがあるが（左右双辺、一四・八×三・七㌢）、本文がない。

両宋の編年史であるが、北宋については李壽の続資治通鑑長編から、南宋の高宗と孝宗の部分は留正の「中興両朝聖政」から採り、光宗以後には独自の記述があるといわれる。巻三六は、目録では度宗、少帝も含むようにあるが、実際は理宗で終って度宗以下は宋季朝事実に譲られたようで、この本には類似した補写があるが宋季朝事実は欠く。

その補写とは巻三六が終ったあとに「広王本末」として四葉、「衛王本末」として六葉あり、いずれも「陳仲微録」といわれる。すなわち、その二王本末を移写したものである。それに巻一九・二〇・三四～三六が補写であり、巻三四～三六には首題の次行に「豊城游明　大昇校正」とあって、二王本末とも明刊本に拠ったことを示す。他に欠葉が巻八第一三葉、一三―五五、一五―六、二三―二六。

蔵印は「璜川呉／氏収蔵／図書」（呉銓）と「好古／敏求」。

復旦大学蔵本はこの三六巻に宋季朝事実二巻を具す三二冊で、南宋刊かと思わせもする美印の季振宜旧蔵本であるが、巻中にまま欠葉がある。台北の国立中央図書館蔵本は存二一巻、七冊（中国訪書志三一八頁）。他はさすがに北京図書館に存するが、

その古籍善本書目には、存巻一～一九の六冊、存巻一～八・一六～二一の五冊、存巻二五～三六と宋季朝事実全の四冊が、また中国古籍善本書目にはさらに上海博物館蔵本が著録される。アメリカ国会図書館にも附宋季朝事実二巻の三二冊があり、その中国善本書目に王重民氏の解題がある。

紀事本末類

通鑑紀事本末四二巻　宋袁樞撰　宋宝祐五年（一二五七）湖州趙与籌刊　〔元明〕遞修　四二冊

薄茶色表紙（三一・八×二三・一㌢）、「通鑑紀事本末」の印刷題簽を貼る。

宋淳熙元年楊万里の通鑑紀事本末敍、宝祐五年の趙与籌序に次で、元延祐六年（一二四一）の陳良弼の補刊序がある。この年、嘉興学官が袁樞（一一三一～一二〇五）の孫の明安から板木を購得し、修補印行したという。通鑑紀事本末総目。

本文巻首「通鑑紀事本末巻第一／（低二格）三家分晋」。左右双辺（二四×一八・八㌢）、一一行、一九字・注文小字双行。この首葉は明修である。版心　白口、単黒魚尾、上象鼻に字数を刻すことがあり、題は「通鑑紀事本末巻幾」、下に丁付と刻工名。修葉は上象鼻に補刊年紀を刻するが、すべて墨で塗りつぶされている。刻工名は前解題とほとんど変らないから、それに委ねて略する。避諱欠画は郭廓字に至る。

補刊年記は元延祐六年、明弘治一二年、嘉靖四二年のものが知られているが、この版には万暦ごろの修葉がみられ、印行はそれより降るかと思われる。表紙や題簽も明後期のもので、一応は原装ということになろうか。

「王鐸／之印」、また「燕京大／学図書／館珍蔵」印。

雑史類

戦国策一〇巻　宋鮑彪注　元呉師道校注　元至正二五年（一三六五）平江路儒学刊〔明〕修　八冊　李

後補金切箔散暗茶色表紙（二六・一×一七㌢）、襯装。

至正一五年平江路牒文は前半を欠き、匡郭だけの白紙二葉の次に以下の文が残る。

牒件今牒

平江路総管府

照験故牒　（以上三行、半葉の上半に大きく間隔をあけて）

至正十五年六月二十一日牒書吏劉瑛承

重校戦国策

僉江南浙西道粛政廉訪司事

嘉議大夫僉江南浙西道粛政廉訪司事伯顔帖木児

中順大夫僉江南浙西道粛政廉訪司事趙

奉訓大夫僉江南浙西道粛政廉訪司事璋保

正義大夫江南浙西道粛政廉訪副使張

江南浙西道粛政廉訪副使

江南浙西道粛政廉訪使

中奉大夫江南浙西道粛政廉訪使迭胥?失

戦国策序が劉（向）序と曾（鞏）序、続けて低二格で呉師道識、泰定二年呉師道の戦国策校注序（首一葉補写）、至正一五年の陳祖仁序、紹興一七年鮑彪の戦国策序が続く。戦国策目録は一葉、ただし詳しい目録一五葉が補写されている。

首題「戦国策西周巻第一／（低八格）縉　雲　鮑　彪　校注／（同）東　陽　呉　師道　重校」。四周単辺（二〇・四×一四・七ヂ）、一一行、二〇字・注文小字双行。版心　線黒口、単黒魚尾、「国策巻幾　（丁付）」の題、ときに下に刻工名がある。耳格があって国名を刻する。補刻葉には小口黒、大黒口のものもある。刻工名は単字のものが多い。

校記が一〇巻中六巻の各巻末にある。

巻三　　乙巳前藍山書院山長劉鏞重校正

巻四・五　至正乙巳前藍山書院山長劉鏞重校勘

巻六　　前藍山書院山長劉鏞重校勘

巻八・一〇　　平江路儒学正徐昭文校勘

明の覆刻本にも同じ位置に同文の校記がある。

尾題は「戦国策宋衛中山巻第十終」。

次葉以後に改丁せずに次の文が続く。李文叔書戦国策後、王覚題戦国策、孫文忠書閣本戦国策後、以下に低二格で姚宏伯題、呉師道識、姚寛書、呉師道識、耿延禧百順書（紹興四年）、低三格で「右修職郎即司理参軍馬陞勘／左迪功郎充州学教授趙漢校勘／左朝散郎通判軍州事崔耀卿／龍図閣直学士左朝奉大夫知軍州事耿延禧」の四行。

巻六第八〇～八二葉が欠葉。補写葉が次のように少くない。巻一第二・八葉、二―三・八・一一、三―七〇・七八・八二、四―二〇・五三・五五、五―四〇、六―九・一三～一五・二六・三一・三五・四七・六五・七〇・七五・七―九・一五・二二・三九・五五、八―九・三五・三六、九―五・一三・四八、一

○―二。

蔵印は「虞山銭曽／遵王蔵書」、「蓉鏡／私印」「張伯元／別字／芙川」（陰）「琴川張／氏小瑯／嬛福地／蔵書」、「李印／盛鐸」（陰）「木斎／蔵書」「李印／伝模」「木犀軒／蔵書」「麐嘉／館印」。

同版本は、さすがに北京図書館に原刻と覚しい存巻四の一冊、存巻九・一〇の明修本と明修本一二冊が三部とあるが、他には台北の故宮博物館に巻九・一〇を欠いた明修本（巻六明覆刻本補配）七冊が存するにすぎない。戦国策としては、漢高誘注・宋姚宏校正の三三巻本の宋紹興刊本、鮑氏国策一〇巻の宋紹熙二年会稽群斎刊本、鮑彪校注一〇巻本の元刊本が、いずれも北京図書館に蔵される。

詔令奏議類

両漢詔令二三巻　西漢詔令一二巻（欠巻二・五）　宋林處撰　東漢詔令一一巻　宋楼昉撰　元至正九年（一三四九）蘇天爵刊　〔明〕修　四冊　李香色表紙（二七・六×一四・七㌢）。

大観三年（一一〇九）程俱の序、続けて林處の自序、同年の蔣瑎の序。洪咨夔の両漢詔令総論と両漢詔令目録がある。本文巻首は左の通り。

「西漢詔令巻第一　凡直叙事実不載辞命者不録如紀載建元元年秋七月詔曰衛士転置送迎二万人其省万人如此類不録　高祖二十四」

双辺（一八・八×一三・七㌢）、一〇行、一八字・注文小字双行。版心　線黒口、双黒魚尾、題「西漢幾　（丁付）」、上下象鼻の右側に字数や刻工名を刻する。刻工名は　季友文　占仲亨　謝成　秀父　李章、東漢に　王古賢　等。

巻一二は末葉を欠くが、大観三年程具の西漢詔令後序がある。全巻欠の巻二・五のほかに、巻四・一一・一二の末葉を欠き、上海図書館本の補写にみると、巻四・一一は各一葉、巻一二は三葉のようである。

墨筆句点が打たれている。

第四冊が東漢詔令で、首に紹定元年（一二二八）の范光識、紹定六年の鄭清之識があり、次に「学生汪衛社校正」の一行がある。

本文首題が「東漢詔令巻第一」であるほかは、款式は同じ。ただ版心の題が「詔令幾」となっている。尾題も「東漢詔令第

十一」。そして嘉定一五年（一二二二）の楼昉の自序がある。

巻一尾の第二一葉と巻三第三・四葉が欠。明修葉がある。

南雍志経籍考に、標目を「両漢詔令十二巻」とするのは、東漢の方を数えなかったのであろうが、次に割注の形で「存者一百七十五巻、失八面、二巻失」という。右の両漢の欠葉はやはり八葉となり、復旦大学蔵本もこれらを欠き、上海図書館蔵本は補写葉である。巻二を欠くのは、中国古籍善本書目の九本、台北の中央図書館本とすべてに同じく、中国古籍善本書目に上海図書館本両漢詔令を二三巻、上海図書館善本書目に西漢詔令を一二巻と完本のように録するのは、この巻が補写されているからである。この上海図書館本は、他の大半が明修本であるのに、ただ一葉が明修かと疑わしいだけで、比較的早印本と思われるが、すでに巻二がなかったわけで、この版木は明前期ごろには失われたものか。

北京図書館古籍善本書目は、存七巻の一部と存二二巻の三部を、すべて元至正九年（一三四九）蘇天錫刊とし、明修のことは触れない。中国古籍善本書目は、存一九巻（西漢一～四六～八　北京×・上海×図書館）を除いて、すべて明修としている（×印は同目録に欠巻があることを示す）。ただし、両館の目録にこれに該当する本が見当らない。

北京図書館蔵本のうちに八冊の本が二部あるが、これはともに涵芬楼燼余書録著録本と思われる。同録によれば、その一に至正己丑（九年・一三四九）の蘇天爵の刊序があるといい、存八巻の旧京書影（344）（345）本も北京図書館現蔵のようであるが、これにもこの刊序があるという。北京図書館と中国の両古籍善本書目が至正九年蘇天爵刻とするのはこのためで、これには従うべきであると考える。標記はこれによる。刻工の活動期もほぼこれに見合うことが、増訂中国訪書志四七四頁に考証されている。

印章は「木犀軒／蔵書」「李印／盛鐸」（陰）「李印／伝模」「麐嘉／閣印」。書録著録。

国朝諸臣奏議零本（存巻四〇）　宋趙汝愚編　宋淳祐一〇年（一二五〇）福州路提挙司季温刊　一冊　李

新補黒色絹表紙（三〇×二四・六チセン）、金鑲玉装（料紙二六・九チセン）。

首題「国朝諸臣奏議巻第四十」。編者趙如愚の銜名はなく、小題、篇名が「（一格低）天道／（二格低）災異四」と続く。

左右双辺（二〇・六×一五・六ｾﾝﾁ）、一一行、二三字・注文小字双行。版心　白口、双黒魚尾、題はいきなりただ「四十巻」とあるが、以下「奏議四十（巻）」など、下象鼻に刻工名、版心が痛んでほとんど採録できない。補刻葉はない。

「李印／盛鐸」（陰）「李印／伝模」「木犀軒／蔵書」「麐嘉／閣印」。書録著録。

この本については前解題（上）二七九頁以下を参照されたい。

伝　記　類

五朝名臣言行録存前集巻一・三・六・一〇　宋朱熹撰

〔明初〕刊　二冊　李

後補黄色表紙（二五×一五・二ｾﾝﾁ）、襯装。第一冊に巻一・一〇、第二冊に巻六・三が収められる。

首題「五朝名臣言行録前集巻第一」。次行に「趙晋—韓国忠献王」のように王朝名と王臣の名が来るが、跨行大字である。左右双辺（一九・六×一二・三ｾﾝﾁ）、一二行、二三字・注文小字双行。版心　小黒口、双黒魚尾、題は「言行前集一ｱ（丁付）」のようにあり、下象鼻に刻工名。刻工名は、子記　付名中　付資　林安　江后　范彦従　辛豪　虞向　虞亮　陳魯　郭名遠　劉伏　劉時者　劉復　劉貫　劉宣　羅六　等で、いずれも正史宋元版の研究一四九頁以下に列挙した者と同名である。

すなわちこの本は明初刊である。木犀軒蔵書題記及書録（一一九頁）に「宋刊本〔宋刻元印本〕」というのは、次に「語渉宋帝皆空格」と記したのに惹かれたものか。内閣文庫の前・後集、続集、外録を備えた一二冊本と同版であるが、私はこの刻工名を見落してこれを〔元〕刊本と誤記した（前稿（上）二八五頁）。

蔵印は「迂／斎」（陰）「澹／支崇久」「季絜／之印」「慤菴／蔵書」（陰）、「古潭州／袁臥雪／廬収蔵」（袁芳瑛）等。書録著録。

鄂国金佗稡編二八巻（欠続編）　宋岳珂編　明嘉靖二一年洪富覆元至正二三年西湖書院刊本　一二冊　李

香色表紙（二五・一×一七・一ｾﾝﾁ）、襯装。

岳珂の鄂国金佗稡編序、至正二三年陳基の金佗稡編序、鄂国金佗稡編目録。

本文巻首「鄂国金佗稡編巻第一／（低三格）岳珂編進」。巻二以下の第二行は「（低三格）孫奉議郎権発遣嘉興郡府兼管内観農事岳珂編進」。

左右双辺（二〇・二×一五・一㌢）、九行、一七字・注小字双行。版心　粗黒口、双黒魚尾、題「金佗稡編巻幾　（丁付）」、下象尾の下方に単字の刻工名を刻し、その多くは陰刻である。

「鄂国金佗稡編巻第二十八」の尾題の次葉から、戴洙の金佗稡編後序。

補写および欠葉が多く、目録第一葉、巻二第九葉、巻四第六・一六葉、巻五―第一一葉、巻一〇第一二葉、巻一九第一四が補写。欠葉は巻三第一七・一九葉、巻五第一三・二二葉、巻六第一一葉、巻九第一九葉、巻一一第四・八葉、巻一二第五・七・一四葉、巻一三第一六葉、巻二四第七・八・一九葉、巻二六第八・九・一六葉、ここには白紙または罫紙が挿まれている。このほかに巻三第一八葉、巻四第二五葉裏後半、巻二葉表全など大きな墨釘のところがある。直接に対比することができなかったが、ここが静嘉堂本で嘉靖三七年に補刻されたか。前解題（上）二八八頁参照。

蔵書印は「廉晋／過眼」（陰）、「曽在／王氏家／過来」、「少泉／蔡氏／珍蔵」等、そして「木犀軒／蔵書」「麐嘉／閣印」。

史鈔類

東萊先生増入正義音註史記詳節二〇巻（欠巻一七～二〇）題呂祖謙編　〔元〕覆南宋中期建刊本　六冊　李後補金切箔散薄水色表紙（二七・七×一四・一㌢）、襯装。

東萊先生増入正義詳節序、題の「東萊」の二字と「先生」の右半が墨で粗く塗りつぶされているが、墨色は印刷のものと同じようにみえる。内容は正義序、索隠序、索隠後序、補史記序、集解叙、古史叙、外紀序。続いて三皇五帝譜系、夏譜系図、商譜系図、周譜系図、秦譜系図、そして五帝国郡地理図、夏商地理図、周地理図、秦六国地理図。次の東萊先生増入正義音註史記詳節目録も、「東萊」の二字を削抹する。尾題には手が加えられていない。

三皇本紀の本文巻首も首の四字が墨で塗抹され、次に「増入正義音註史記詳節巻之一上」と題し、以下、六行にわたって低六格で「集解裴駰、正義張守節、索隠司馬貞、補史司馬貞、古史蘇轍、外記劉恕」と列挙する。さらに五帝本紀の首も「東萊先生増入正義音註史記詳節巻之一」の「東萊」が薄く削抹され、以下の各巻も首題はほとんどこの二字ないし四字が印行時に同じ墨で塗抹されたようである。ただ巻四は剜去され、巻八～一一の首題とすべての尾題にはそれが行われていない。したがっ

て全巻の尾題は「東萊先生増入正義音註史記詳節巻之十六」。

左右双辺（一六・一×九・七㌢）、一三行、二四字・注文小字双行。版心　線黒口、双黒魚尾、題は「史幾」。眉上に小見出、左上方に耳題を刻する。匡貞敦等の字は欠画。

蔵印は「古潭州／袁臥雪／廬収蔵」（陰）（袁芳瑛）、「木犀軒／蔵書」「李印／盛鐸」（陰）「麐嘉／館印」。書録著録。

南宋中期建刊本の覆刻で、前解題（下）二二頁以下の宮内庁書陵部蔵本と同版であるが、劉氏静得堂の扉書（封面）はない。あるいは版木が劉氏の手を離れてからの印行か。

諸儒校正東漢詳節三〇巻　題宋呂祖謙編　〔元末明初建刊〕　一二冊　李

後補金切箔散乳白色表紙（二一・七×一四㌢）、襯装。

諸儒校正東漢書詳節目録。図の類は一切ない。

本文巻首「諸儒校正東漢詳節巻之一／（低五格）范曄（双行注が二行分）／（同）章懐太子（双行注が二行分）」。

双辺（一五・七×一〇・三㌢）、一四行、二四字・注文小字双行。版心　線黒口、双黒魚尾、題「東漢一」。眉上に標目、左欄外に耳題。玄桓慎等の字に欠画がわずかに残る。尾題「諸儒校正東漢詳節巻之三十」。

一部に朱句点。水洩れのためか、紙が縮み、小口に染みがある。

「木犀軒／蔵書」「李印／盛鐸」（陰）「麐嘉／館印」「李印／伝模」「木斎／蔵書」「廬山李氏山房」の諸印。書録に「宋刊本〔元刊本〕」として著録。

前掲の史記のさらに覆刻か。台北の故宮博物院蔵本（増訂中国訪書志二四六頁）と同版であろう。

東萊先生校正隋書詳節二〇巻　題宋呂祖謙編　〔元〕覆南宋中期建刊本（巻一六・一七補配明正徳一一年慎独斎刊本）　八冊　李

後補金切箔散薄水色表紙（二一・八×一四・一㌢）。襯装。

隋世系之図と隋地理之図が各半葉。東萊先生校正隋書詳節目録。

本文巻首「東萊先生校正隋書詳節巻之一／（低一格）帝紀（隔一〇格）唐特進魏　徵　撰」。ここにも「東萊」の二字を薄墨で塗抹しようとしてあり、他の巻にも稀にその跡がある。「徵」字は欠画。

左右双辺（一五・八×一〇・四㌢）、一四行、二四字。版心

線黒口、双黒魚尾、題は「隋幾」。眉上に標目を行二字で、左方に「高祖」「天文志六巳五」のように耳題を刻する。避諱欠筆は貞匡字にも残るが、他はほとんど欠かない。尾題「東萊先生校正隋書詳節巻之二十」。

一部に朱句点を加える。

蔵印「古潭州／袁臥雪／廬収蔵」、「木斎／宋元／秘笈」「木犀軒／蔵書」「明墀／之印」（陰）「李氏／玉階」「李印／盛鐸」（陰）「木／斎」。書録に「宋刊本〔元刻本〕」として著録。

東萊校正五代史詳節一〇巻　題呂祖謙編　〔元〕覆南宋中期建刊本　四冊　李

後補金切箔散乳白色表紙（二一・八×一四・一㌢）。襯装。

陳師錫の五代史記序。次に後魏世系図、北斉世系図、後周世系図があるが、北史詳節からの竄入か。五代分拠地理図と唐から宋に至る五代十国世系図・同統表がある。東萊校正五代史詳節目録。

首題は「東萊校正五代史詳節巻之一／（低一三格）欧陽（隔三格）脩（同）撰／（低一三格）徐（三）無党（二）註」。

左右双辺（一五・六×一〇・四㌢）、一四行、二四字・注文小字双行。版心　線黒口、双黒魚尾、題「五代幾」。眉上に行二字の標目、耳題。貞燉字に欠画が残る。尾題「東萊校正五代史詳節巻之十」。

蔵印は「□／堅氏」「道亨／甫」「志／清」（陰）「秋／水」、「麐嘉／館蔵」。書録に同様に著録。

同版本や同系統の刊本については、前稿（下）二七～八頁に記した。

通鑑総類巻一七零巻（存第三一～三九葉）　宋沈樞撰　元至正二三年（一三六三）平江路儒学刊　一冊　李

新補群青色表紙（二九・九×一九・三㌢）、粘葉装（襯紙を插み、それに裏面を薄く糊付けする、裏は開かない）。

左右双辺（二五・二×一六・八㌢）、一一行、二三字。版心線黒口、単黒魚尾、題は「姦邪門三十一（傾険門三十七）」（数字は丁付）、上下象鼻の右半に字数と刻工名を刻する。刻工名は元、東。第三六葉第三行で姦邪門の、第三九葉裏面第二行で傾険門の本文が終るが、以下は空行で尾題はない。

刷りも字も良いが、第三一～三四・三七・三八葉と大半の版面の中央やや下に左右に細い亀裂が入っている。

通鑑総類は資治通鑑の文を冊府元亀の例に仿って二七一門に分けて標題を掲げ、間に司馬光の議論を取ってこれに附したものであるが、門目に重複するようなものがあるなどして繁雑であると、四庫提要はいう。完本等の首に宋嘉定元年（一二〇八）楼鑰の序があって、広東の潮陽で開版されたとする。それに続く元至正二三年周伯琦の序に、江浙中書省左丞蔣公徳がこれを購得し、呉郡庠に命じて重刻させたことをいう。これをもって、中国古籍善本書目や北京図書館古籍善本書目は呉郡庠刻本と著録する。一方、この零本にはみえないが、刻工名に平江の二字を冠するものがあり、呉郡が宋代に平江府、元代に平江路となったことから、ここでは呉郡庠を平江路の儒学と解した。

北京図書館に四部（二〇巻・一〇巻・五巻・一巻）を蔵するほか、中国古籍善本書目によれば、上海、南開大、遼寧省、吉林省、広東省高州県の各図書館に完本が、清華大と故宮博物院図書館に残本がある。台北には六部が存することを、中国訪書志が誌す。

漢雋一〇巻　宋林鍼撰　〔元末明初〕刊　四冊　李

後補青紫色絹表紙（二七・五×一八・六ｾﾝﾁ）。

宋淳熙一〇年楊休の漢雋後序がここにあって、漢雋目録。

本文首題「漢雋巻第一」。左右双辺（二〇・五×一五・九ｾﾝﾁ）、九行、各篇に関して漢書中の二～五字の成語を大字で挙げて、それを引く句を小字双行三〇字で掲げる。版心　粗黒口、双黒魚尾、題はなく「巻一」のように巻次を示すだけで、丁付、下象鼻に稀に刻工名。丁付は全一〇巻を通して一四六葉、刻工名は単字で仁、益がある。

「漢雋巻第十」の尾題の次に、元延祐七年袁桶の漢雋後序がある。

巻四の第四九・五〇葉、巻九の第一一八葉が欠葉。

巻末に「書直白／金三百両」「洪氏蔵／書万巻」（陰）「清俸買来手／自校子孫読／之知聖教鬻／及借人為不／孝唐杜暹手」（清の于昌進の「清俸／買来」（陰）印とは別印か）の三印のほか、「李氏／玉階」「明墀／之印」（陰）「木犀軒／蔵書」「李印／伝模」「木斎／蔵書」。書録著録。

又　四冊　李

後補香色表紙（二六・五×一八・三ｾﾝﾁ）、襯装。右半に「漢雋

十巻四冊 元刊明修本／ 椒微蔵（印）」（印は「李印／盛鐸」（陰））と墨書。

重刊漢雋序と紹興三二年林鉞の序と漢雋目録があって本文。巻末に淳熙一〇年楊天休の漢雋後序。

前掲本とまったく同版であるが、この方がやや早印。李氏は元刊明補本（元刻明印本）とするが、補修はなく、粗黒口などの版式からはむしろ全葉が明版にみえる。元末明初刊とするのが妥当であろう。前解題（上）三〇頁所掲の静嘉堂蔵本は版心が白口であり、刻工名も書学正韻、一〇行本註疏、文献通考、通志など元後半期の刊本と合うから、これらはこの本に先行するものである。

中国古籍善本書目は山東省博物館蔵の元統元年（一三三三）刊本と元刊本三部（甘粛省・四川省・鄭州大学図書館）を著録するが、いずれも行格がわからない。因みに前稿でも触れたが宋刊本には淳熙五年（一一七八）滁陽郡斎刊本（上海図書館・続古逸叢書本）、淳熙一〇年象山郡斎刊本（北京図書館・遼寧省図書館）、嘉定四年（一二一一）滁陽郡斎刊本（北京図書館）があり、すべて九行、小字三〇字、白口、左右双辺で、一部に部分を改刻するところがあるものの、元版に至るまで直接間接に覆刻の関係にあるらしい。その一例として、巻二第二二葉表一行の慎の欠画がこの元刊本にまで及んでいる。

蔵印は「高淳県／儒学記／（左半二行不明）」（八・三×五・三ｾﾝﾁの長方印）、「淮陰／蔵書」「千寿／昌印」、「木犀軒／蔵書」「李印／盛鐸」（陰）「麐嘉／館印」。書録著録。

眉山新編前漢策要残本（存巻七・八・一一・一六・一七・一九・二〇）（有欠）　撰者不詳　〔南宋　蜀〕刊　一冊　李

後補暗焦茶色表紙（二六・二×一五・六ｾﾝﾁ）、襯装。副紙に李盛鐸の「眉山新編前漢策要／残本不知原書巻数亦坊賈／射利所編託名眉山耳然各／家書目不明（不録）不視為秘籍也／癸酉丙申日　盛記（印）」（印は「李印／盛鐸」（陰））の跋語がある。

本文首題は「眉山新編前漢策要／（一格低）前漢七」。左右双辺（一五・四×一〇・六ｾﾝﾁ）、一四行、二五字・稀に注小字双行。版心は白口で、単黒魚尾、「前漢　（丁付）」と題する。宋諱欠画は、玄敬 殷 匡 桓 字にあり、慎を欠かないが、あまり厳格ではない。

残本というより残葉で、存計二五葉。それを表示する。

巻七　存一・二・八・九葉（目録は一～四葉とするが、版心丁付はこのようにみえ、文意も二と八は続かない）
巻八　全六葉中の存五・六葉
巻一一　存四葉
巻一六　全六葉中存第五・六葉
巻一七　全六葉存
巻一九　全七葉中欠第五葉
巻二〇　存首一葉

漢書の巻数は二七と多いようであるが、このように一巻の葉数が少い。型式は、この巻七首にみれば「韓信為高祖書取天下策」の題に設問が二行、これに策（解説）が一七行あり、一巻について五～八題が収められる。

尾題は各巻ともない。字様はやや蜀風。

朱句点を施す。蔵印は「李／滂」（陰）「少／□／張」、「李印／盛鐸」（陰）「木犀軒／蔵書」「麐嘉／館印」。

眉山新編十七史策要一五〇巻の前漢のうちの残本であろう。旧京書影（366）～（369）に、眉山新編十七史策要総目の首、眉山新編史記策要目録の首、眉山新編南北七史策要（次行は「元魏四」）の首、眉山新刊十七史分の尾（第八葉）の各半葉の書影を載せるが、総目（一〇行）を除いていずれも左右双辺、一四行・二四～二五字、白口、単黒魚尾、字様は蜀風を帯び、提要に匡郭の寸法が五寸～四寸八分×三分五分～六分とあって、同版本と思われる。この総目に全一五〇巻、班固前漢書は二七巻とある。清内閣書、北平図書館旧蔵であるが、現所在を聞かない。北京図書館に存一一一巻（史記六巻全、前漢書一～一五・二二～二七、後漢書二六巻全、魏志一～四、蜀志二巻全、呉志五巻全、晋書六～二一、南斉書三巻全、梁書三巻全、陳書二巻全、元魏書八巻全、周書二巻全、北斉書二巻全、隋書三巻全、唐書一～四・一〇～一二）がある。

新増音義釈文古今歴代十八史略二巻　元曽先之編　〔元末明初〕刊　二冊　李

後補白色横漉模様表紙（二六×一八・五㌢）、外題「十八史略上（下）」と墨筆、近世の日本のものである。料紙の高さ二五㌢。左右は匡郭にほぼ沿って切取り、台紙に貼ってある。

新増校正十八史略綱目が補写。この題の次行に「盧陵前進士曽先之編」とあり、末には歴代国号歌、歴代世年歌、歴代甲子紀年、歴代国都が附けられ、尾題は「新増音義釈文古今歴代十

八史略綱目」という。この末二葉は原本が存する。

首題は「新増音義釈文古今歴代十八史略巻上」と跨行大字。双辺（二一・三×一三・一ｾﾝﾁ）、一八行、三二字・注文小字双行三三～三五字。版心　線黒口、双黒魚尾、「十八史　一（二）」と題する。「太古」と円圏陰刻で題してその下から本文が始り、上巻は東晋まで、下巻は南北朝から南宋末に至るのは十八史略一般の通例か。

朱筆句点、朱引、圏点、傍点、返点等、わが室町末近世初に施されたものである。補写もそうで、当時の眉上書入もある。稀に墨筆で校字、釈音注などが欄外下方に書入れられている。上巻の尾一葉と下巻の尾三葉も補写。その尾題は「古今歴代十八史略巻之下終」。

蔵印は「麐嘉／閣印」「李印／伝模」「木犀軒／蔵書」「李印／盛鐸」（陰）。李氏蔵書には和刻本も多い。

地理類

新編方輿勝覧七〇巻　宋祝穆編　〔元〕覆宋〔咸淳〕刊

本　〔明〕修　　三二冊　李

後補香色表紙（二四・三×一五・五ｾﾝﾁ）、襯装。料紙のかなり痛んだのを修補してある。

嘉熙三年呂午の序、同年の祝穆の自序。

新編方輿勝覧目録、第八・二二・二六葉は欠、二四・二五葉は補写。以下、本文にも欠葉・補写葉が少くない。

「新編方輿勝覧巻之一／（低八格）建　安　祝穆　和父編」。左右双辺（一六・九×一一・四ｾﾝﾁ）。一四行、二三字。

版面がかなり破損したり、漫漶が甚しい葉があり、補刻葉もあって、墨釘の箇所も目につく。相当に後印本である。

前解題（下）三五頁以下に詳記した。

蔵印は「汪印／文柏」「休寧汪／季青家／蔵書籍」「古香／楼」（円）「柯庭」「柯庭／流覧／所及」、「古田／家」（陰）「宝劼／蔵宋元／明本之印」、「宝／古斎」（陰）、「伯寅／蔵書」（潘祖蔭）、「李印／盛鐸」（陰）「李印／伝模」（陰）「木犀軒／蔵書」「木斎／蔵書」「木／斎」「麐嘉／館印」「廓／軒」「両晋六朝／三唐五代／妙墨之印」。

聖朝混一方輿勝覧三巻　元劉応季編　〔新編事文類聚翰墨全書後集〕　〔明正統元年〕（一四三六）刊

五冊　李

後補金切箔散薄水色表紙（一八・六×一二・四㌢）、襯装。

目録を欠く。首題「聖朝混一方輿勝覧巻上」は跨行大字。次行から次のような木記五行がある。「唐虞三代以来之州域北不踰幽并南不越嶺徼東至于海西／被于流沙其間蛮夷戎狄之地亦有未尽啓闢者方今六合混／一文軌会同有前古所未有之天下皇乎盛哉是編凡山川人／物沿革本末靡不具載学士大夫端坐牕几而欲周知天下摻／弄翰墨而欲得助江山不労余力尽在目中信乎其為勝覧矣」。

双辺（一五×一〇・一㌢）、一二行、二〇字・注小字双行。版心　小黒口、双黒魚尾、題は「方上后乙」「翰墨全書后乙集」などのように刻する。尾題は上二字が削られて「□混一方輿勝覧巻下」とある。

欠葉は巻上第五葉、巻中第一～一三葉・三七葉裏以下（存第一四～三七葉表）。巻上は二冊で存七一葉、巻中が一冊で二三葉半、巻下が二冊で七九葉という構成である。ただ巻中は料紙の高さが一八㌢とやや小さく、紙質は異るとみえないが、あるいは補配か。

蔵印は前掲本と同じ「古潭州／袁臥雪／廬収蔵」、「木犀軒／蔵書」「麐嘉／館印」。

書録著録。李氏書目とも元刊とするが、版心題からも窺えるように、中国訪書志（二四九頁）に証された通りの明刊本で、これも故宮善本書影初編に所収の本と同版である。すなわち同版本は、あるいは新編事文類聚翰墨全書の一部として、米沢市立米沢図書館、大東急記念文庫（二部）、台北の故宮博物院と中央図書館にあり、米沢本に「正統元年丙辰／善敬書堂新刊」の木記がある。中国古籍善本書目にも、北京、中国人民大学、中国社会科学院、上海、復旦大学の図書館に蔵されることをいう。後二本は閲覧したが、刊記はない。

金陵新志一五巻　元張鉉撰　元至正四年（一三四四）集慶路儒学刊　明正徳一五年・〔嘉靖〕遞修四〇冊　李

後補濃藍色表紙（三一・四×二〇・二㌢）、金鑲玉装（料紙高さ二八・九㌢）。

至正四年の李元岱の金陵新志序、抄録修志文移、台府提調官掾職名、台府官掾職名、集慶路総管府の修志職名、修志本末、新旧志引用古今書目（新旧の二字は入木）、金陵新志総目が続く。

本文は「金陵山川封域図攷」と題する地図一葉から始まる。巻二以下には「金陵新志巻之二」の首題がある。左右双辺（二二・九×一六・九㌢）、九行、一八字・注小字双行。版心　白口、双黒魚尾、「金陵新志巻幾　（丁付）」と題し、上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名がある。上象鼻に正徳一五年の補刻年記を、ときには南京国子監などの文字とともに刻する葉がある。刻工名は前解題に同じ。

正徳修葉がすでに少しく漫滅し、本文・図ともに嘉靖ごろの補刻があって、そこには墨釘のところが少くない。補写葉も多く、次のようにある。巻三上第七五葉、巻三中第一・二・六六・一〇九葉、巻四第二二・四四・七三葉・巻五第一八・八一・八二葉、巻六第九・一二葉、巻一一第七・八・三五・三六・八三・八四・八七葉、巻一二第四九・五〇葉、巻一三上第二八～三〇・六四・七〇葉、下第四七葉、巻一四第九・一〇・六七・六八葉、巻一五第九～二三葉。

「金陵新志巻終」の尾題は補写であるが、その次に「本路提調司吏江子澄」から「編写生員趙天寿」までの二一名の列銜一二行がある。

南雍志経籍考に明嘉靖一〇年の少し前に南京国子監にあった版木を、「金陵新志十五巻存者一千一百六十四面壊九十二面」という。この壊九十二面の一部を補刻し、一部を欠葉のまま印したのがこの本であろうか。

蔵印は「漢唐斎」「馬印／玉堂」（陰）「笏／斎」等。

現存の同版本についても前解題に誌した。

無錫志四巻　題元王仁輔撰　〔元末明初〕刊　四冊　李

後補薄茶色表紙をさらに新補青紫色絹表紙（二七・二×一六・八㌢）で覆う。襯装。

無錫志総目二葉は補写。

本文巻首「無錫志巻之一／邑里第一」。この葉は中央部の残欠が過半に及ぶ。

左右双辺（二二・四×一五・三㌢）、一〇行、二二字。版心白口、双黒魚尾、題「錫志巻幾」、下象鼻に丁付。

巻三下第一五葉裏以下、巻四上、巻四下第二二葉裏以下が欠葉。

稀に眉上に墨筆注記があり、また校語を記した紙片を粘る。

補写の総目の首に、方一〇・三㌢と大型の「翰林／院……」印があるが、以下の字が読めない。他に「談氏延／恩楼／収蔵

印」、「古潭州／袁臥雪／廬収蔵」（陰）、「高社？／之印」、「李／少微」、「木斎／審定」「木斎／蔵書」「李印／盛鐸」（陰）「木斎／審定／善本」「木犀軒／蔵書」「明墀／之印」「李氏／玉陔」「麐嘉／館印」の諸印を捺す。書録著録。

中国古方志考によれば、王仁輔の無錫志は、銭大昕の元史藝文志、倪燦の補遼金元三史藝文志、千頃堂書目に二八巻本が著録される。四庫全書総目提要（巻六八）のあえて全文を引くと、次の通りである。

無錫県志四巻　両広総督採進本　不著撰人名。考千頃堂書目、有元王仁輔無錫県志二十八巻、与此本巻数不符、蓋別一書也。考明史地理志、洪武二年四月、始改無錫州為県。是志古今郡県表末、雖止於陞無錫県為州、然標題実称無錫県、已為明初之制。又郡県表止元貞、而学校類中載至正辛巳郷挙陸以衛、則所紀已下逮元末、是洪武中書矣。第一巻為邑里、第二巻為山川、第三巻為事物・分上下二子巻、第四巻為詞章・亦分上中下三子巻、中又分小類二十一、詞簡而事該、亦地志之善本。惜首巻原序已佚、其撰次本末、不可得而考也。元史地理志、称成宗元貞元年、陞無錫為州、此志乃云二年、作志者紀録時事、歳月必確、以是推之、知元史疏漏多矣。是亦書貴旧本之一験也。

これに対して書録は、「〔題元王仁輔撰〕明初刊本〔元刊明初印本（四庫全書底本……）〕と題し、行格や巻の構成を記したあと、「所載郷挙至至正辛巳（元年・一三四一）止、為元末所修、明初所刻」という。題の〔　〕内は趙万里氏の北京大学図書館李氏書目の記事が補われたものである。

中国古籍善本書目に二八巻本はまったくみえず、台北にもない。四巻本もこの本だけが著録されていて、「〔洪武〕無錫志四巻明初刻本」とあり、王仁輔の名は記されない。四庫全書総目提要を尊重したものか。

本版の本文を四庫全書（文淵閣本）と対比する機を佚したが、巻一の古今郡県表が元の成宗元貞二年丙申（一二九六）で、巻三の郷挙が至正四年（一三四一）の陸以衛で終ることに変りはない。しかし四庫全書本と異って、内題が「無錫志」、版心題が「錫志」であって「県」がつく例はないから、必ずしも洪武二年の改県の記事にこだわる必要はなかろう。また書写ながら総目があり、本版に欠けた部分が四庫全書本に備わり、翰林院や湖南潭州袁氏の印があることからは、両広総督採進の線が出て来ず、これが四庫全書の底本とはすぐには結びつかない。加え

て版式は元末刊本の様式を残しているとみられるから、洪武編無錫志が実在するなら再考しなければならないが、ここではひとまず元末明初刊本とするのが妥当と考えられる。撰者についても未詳であるが、元末明初刊となれば王仁輔しかありえないと思い、趙氏に倣って標記した。

大唐西域記零本（存巻四）　唐釈玄奘記　唐釈弁機撰
宋崇寧二年（一一〇三）福州東禅等覚禅院刊（崇寧万寿大蔵）　一帖　李
後補草花文青色絹表紙（二七・三×一一・二㌢）、折帖。裏打補修。
首に「福州等覚禅院住持伝法沙門普明　経板頭銭恭為／今上皇帝祝延　聖寿闔郡官僚同資禄位雕造／大蔵経印板計五百余函時崇寧二年十月日謹題」の三行がある。
巻首「大唐西域記巻第四（隔九格）転／（低五格）三蔵法師　玄奘奉　詔訳／（同）大総寺沙門　弁機　撰」。
天地は単辺（高さ二四㌢）、無界、行一七字。一折六行。版心に「転　四巻　（丁付）」のように刻する。刻工名は仁、文。末葉の尾題の前に「十三（丁付）山官厚」と。
尾題「大唐西域記（隔数格）転」の下方やや右に「鄭寧印造」の墨印がある。
「三聖寺」の円印、それに「寺田／盛業」「字士弘／号望南」「読杜／艸堂」印。書録著録。

職官類

大唐六典残本（存巻一～三（欠後半）・一二～一五）　唐玄宗撰　唐李林甫奉勅注　宋紹興四年（一一三四）温州州学刊〔南宋前期・同中期〕逓修　二冊　李
第一冊　後補濃紫色表紙（三〇×二一㌢）、黄色絹地題簽が貼られるが未記入。第二冊　後補乳白色表紙（三〇・六×二一・八㌢）。ともに粘葉装であるが、第一冊は紙背を前葉と次葉と軽く糊付けしてある。
本文首題は「大唐六典三師三公尚書都省巻第一／（低二格）御撰／（低三格）集賢院学士兵部尚書兼中書令修国史上柱国開国公臣李　林甫等奉／敕注上」。ここは南宋中期修葉であるが、巻二以下の首葉はいずれも原刻で、「大唐六典尚書吏部巻第二」とあるように、巻によって首題の中間の小題が異るほかは変りがない。
左右双辺（一九・九×一三・七㌢）、一〇行、一九～二一字・

注文小字双行二三字。版心　白口、単黒魚尾、「六典幾」の題とその下方に丁付、刻工名を刻する。南宋中期の補刻葉の一部には、上象鼻に大小字数がある。粘葉装であるだけに版心の破損した葉も少くなく、本文も原刻葉はいささか漫漶があって補写されたところがある。

欠画は　玄絃　敬警　弘殷　匡筐　境鏡　恒　貞徵　署　の諸字にある。ただ後述するようにこの本には紹興四年の刊記があるのに、原刻の巻一四第八葉（刻工万免）裏五行にその後に当る「慎」字の末画が欠けている。磨滅したのか、一部に補刻を加えたときに削ったのかわからないが、本来ありえないはずのもので、南宋中期修の巻二第一七葉（刻工李）の裏二行ではこの字を欠いていない。刻工名は原刻は、

林元　余正　孟立　曹溢　万正　萬勉（万免）

の六名、後述する他の存巻に、林允　江青　郭実　郭敦　陶中　がいるという。補刻刻工は

毛端　王定　王明　余敏　呉春　宋通　李政　沈珍　施珍
夏乂　張明　陳彬　楊昌　劉文　龐知柔

巻三第一一葉以下が欠葉。

尾題は「大唐六典光禄寺巻第十五」。

葉数は巻一が一一、巻二が第一一葉を欠いて二一、巻三が二二のうち一一まで、巻一三が六、巻一四が二八、巻一五が九である。この巻一と巻一二の首葉、巻一五末葉の紙背に双郭の

「国子監崇文閣官書　借読者必須愛護損壊欠失典掌者不詳収受」（双郭　外郭一五・六×六㌢）

の印が捺され、傅増湘はこれを元代の官印であるという。

蔵園羣書題記初集や同経眼録によれば、この本は民国七年（一九一八）一〇月、傅氏が教育総長のときに午門楼上で内閣紅本の蔴袋中に発見し、歴史博物館に収めたものが後に市場に出、現在一五巻が三箇所に分蔵されるうちの一である。巻七～一一の五巻は南京図書館に、巻三のこの本に続く後半一〇葉（欠第一五葉）と巻二八～三〇の三巻とが、傅氏を経て北京図書館にある。これらを併せ、巻三第一五葉も繆荃孫の宋元書式から補って、古逸叢書三編之三に影印された（一九八四年　中華書局）。

巻三〇の尾題の次行から、低三格で刊書題記一四行があり、蔵園羣書経眼録に移録もされているが、その末三行に「紹興四年歳次甲寅七月戊申朔／左文林郎充温州州学教授張希亮校正／左宣教郎知温州永嘉県主管勧農公事詹棫題誌」という。すなわ

ち、宋紹興四年（一一三四）温州州学刊本ということで、それは字様、版式からほぼ肯ける。

原刻刻工をみると、温州が両浙東路でも南に位置するためか、南宋初期江浙地方刊の諸書と共通する名はごく少い。一五巻の一一名のうちにも、余正が同じ紹興刊の白氏六帖事類集（傅氏旧蔵・天理図書館現蔵）にあるばかりで、この名はまた乾道九年（一一七三）序刊の東坡集（内閣文庫蔵）や南宋中期刊の周易玩辞（台北中央図書館北平蔵）にもみえる。このように原刻刻工からは必ずしも紹興四年刊を証明できないが、次の補刻葉からそれが妥当であると推定される。

補刻は北京大学本全一二六葉のうち四〇葉で、版面からみて二度にわたって行われたと思われる。第一次修は南宋前期で、その一一ないし一二葉かとみえ、残りが南宋中期修となるが、この関係は南宋刊本通典（天理図書館蔵）の場合と刻工が共通することで裏付けられる。前掲の補刻刻工一七名のうち一一名が通典の補刻にも携っているが、李政・李詢、洪坦、劉文が通典でも南宋前期の、王朝、呉春、余敏、宋通、夏乂、張明、陳彬が南宋中期の補刻刻工である。南宋前期刻工にはほかに毛端がいて、かれらはいずれも中期修本も少しは刻しているが、劉文の名が明州刊文選の紹興二八年修工のなかにあるのをはじめ、乾道九年刊の淮海集（内閣文庫・台北故宮博物院蔵）、同年序刊の東坡集（内閣文庫蔵）、紹熙三年の礼記正義を軸としてその前後に刊刻された越刊八行本注疏の周易注疏・尚書正義・論語注疏解経・孟子注疏解経（両浙東路茶塩司刊）等の刻工であって、第一次修は紹興末から乾道年間にかけて行われたと考えてよかろう。そうであれば、原刻は紹興四年であってよいわけである。

南宋中期刻工は一二名であるが、中期刊の古史に九名、贛州刊文選の中期修に四名、浙刊九行本南北朝七史の中期修の宋書に九名、南斉書に一〇名、梁書に七名、陳書に七名、魏書に一一名、北斉書六名も同じ名がみえる。これらの補刻は通典や七史と同様、版木が移されて臨安の国子監で行われたものであろう。西湖書院重整書目に唐六典があるから、これは元代までは残存していたものと思われる。しかし南雍志経籍考にはもはやみえず、明の南京国子監には少くとも嘉靖までは伝えられなかった。

この本の国子監崇文閣官書印は南京図書館本の巻七首、北京図書館本の巻二八首と巻三の尾にもあるというから、これらは

すべて僚巻で、南宋後期に国子監で印行されたものか。奥村郁三氏はこの宋版に次ぐ明正徳一〇年（一五一五）刊本三〇巻がこれを底本としているから（氏は覆刻というが行格が異る）、当時、完本が存在していたと推定される。

北京図書館現蔵本を有した傅氏が校宋紹興刊唐六典残本跋（蔵園羣書題記巻三）を著し、玉井是博氏が一九三〇年以来、校勘に努力されたことはよく知られている。これらを含め唐六典全般について、奥村氏の解説が大いに参考となる（滋賀秀三編中国法制史基本資料の研究　8大唐六典　東京大学出版会　一九九三年）。

なお古逸叢書三編の影印本は、宋本大唐六典として一九九一年に洋装縮印されていて、この調査にも利用することができた。中国版刻図録図版一〇四には巻三〇首葉の書影が掲載され、原刻葉で刻工は郭実らしい。

政書類

通典残本（存巻一～五・二六～三五・八一～一〇〇・一一一～一四五・一六三～一八〇）　唐杜祐撰　〔南宋初期〕刊〔南宋前期・同中期・元〕遞修　一八冊

新補群青色表紙（三二・三×一九㌢）、襯装。唐李翰の通典序。本文巻首「通典巻第一／（低四格）京北杜（隔三格）佑　字君卿纂」。左右双辺（二二・六×一五・五㌢）、一五行、二八字内外・注文小字双行三五字内外不等。版心　白口、単黒魚尾、上象鼻にときに刻工名、下に刻工名を刻し、とくに通典の題はなくて第幾冊とする。巻一首葉は南宋中期修、刻工は泰宗であるが、五巻を一冊として丁付を通すのは北宋刊本からこの至元修本まで同様である。字数が入るのは南宋中期修業からであるが、それがかなり墨釘になっている。版心下方がかなり破損して刻工名のよくみえない場合が少くなく、とくに原刻刻工がわからないが、修工には次のような者がいる。

弓成　王信　王寿　李倍　俞昌　張亮　曹栄　（南宋前期修）
方至　方得時　王寿　石昌　朱生　何澄　何沢　何鎮　余靖
呉昌　宋通　李仲　李師正　李益　沈秀　沈思恭　周南
金栄　金滋　孫日新　泰宗　高寅　張允　張用　張亮　張栄
徐仁　曹冠栄　曹興祖　陳良　陳寿　楊栄　董辰　董澄
劉仁　銭周祥　（以上南宋中期修）
朱元　何浩　沈定　沈祖　金文栄　張太初　胡勝　苻茂
高友　陳新　謝杞　（以上元修）

朱筆句点、傍点、朱引が一部に、また眉上に墨筆で標注が記

される。蔵印は「木斎」「李印／盛鐸」（陰）「木犀軒／蔵書」等。

増入諸儒議論杜氏通典詳節四二巻（欠巻二二・二三）

〔元末明初〕刊（覆元至元二三年刊本）　一三冊　李

新補薄茶色縦透文入覆表紙（二二・九×一四・九ｾﾝﾁ）、襯装。一部に艶出青緑色の元表紙を残す。

李翰序、新纂杜氏通典詳節図譜、増入諸儒議論通典詳節綱目、この末に「至元丙戌／重新繡梓」の木記、「杜氏通典篇第題旨」、増入諸儒議論姓氏があって、本文巻首「増入諸儒議論杜氏通典詳節巻第一」。

左右双辺（一七・三×一二・三ｾﾝﾁ）、一四行、二三字・注文小字双行。版心　線黒口、双黒魚尾、その間に題の「典幾」と丁付、上象鼻に大小字数。宋諱欠画が一部に残り、高宗の勾を「太上皇／帝嫌名」とし、孝宗の惇を「御／名」とするのは、北京図書館に一部が存する宋紹熙五年刊本の覆刻本であるからであろう。しかし、字様からは木記の至元二三年（一二八六）刊本とも思えず、元末に至って更に覆刻されたものと考えられる。

蔵印は「歳朔」（鎮盤）「彦威」（陰同）「王氏／家蔵」、「盛／鐸」（陰）「木／斎」「木犀軒／蔵書」「麐嘉／館印」。それに「光山／胡氏／家蔵」（陰）「果／亭」「猶陰」（円）「恕」（円）「敬慎／□□」（陰）等の印を捺す一紙を粘る。書録著録。

古史残本（存巻四〇・四一・五一～五五）　宋蘇轍撰

〔南宋中期　浙〕刊　二冊

後補金切箔散薄桃色表紙（三〇・七×一四・五ｾﾝﾁ）、襯装。

本文巻首「廉頗藺相如列伝第二十八（隔二格）古史五十一」。左右双辺（二八・九×一五・五ｾﾝﾁ）、一一行、二二字・注文小字双行二四字。版心　白口、双黒魚尾、上象鼻に千字文号と大小字数、題は「古史伝二十八」のように、下象鼻に丁付と刻工名を刻する。刻工名は

丁松年　方中　王定　王恭　王渙　王寿　石昌　何澄
呉春　呂信　宋琚　宋祐　李仲　沈定　金崇　金祖　金栄
孫春　徐珙　徐茂　馬祖　曹鼎　章忠　陳伸　陳寿　楊潤
董澄　詹世栄　劉昭　蔡邠　蔣容　鄭春　龐汝升　龐知柔
顧達

いずれも南宋中期江浙地方の刻工である。前解題（下）参照。

「麐嘉／閣印」「木犀軒／蔵書」、書録著録。

金石類

集古録跋尾残本（存巻一・二・四　有欠）　宋欧陽脩撰

〔南宋中期〕刊　　三冊　李

後補金切箔散濃紫色絹表紙（三四×二二・八㌢）、粘葉装。

本文首題は巻一首が欠けて、次に「集古録跋尾巻第二　欧陽文忠公集一百三十五」。

左右双辺（二〇・六×一四・五㌢）、一〇行、一六字・注文小字双行。版心　白口、双黒魚尾、上象鼻に字数、題「集古録幾」、下象鼻に丁付と刻工名を刻する。刻工名は、才仲と蔡懋、単字が仲宗元懋武俊錫寧振発銑。避諱欠画は、弘　貞　署樹　桓　完　慎　敦字にある。

尾題「集古録跋尾巻第二」。

欧陽文忠公集一五三巻中の集古録跋尾一〇巻の残本である。欠葉が巻一第一・二葉と巻四第二一葉以下。

堂々たる美本で、墨色鮮かな早印本である。匡郭の周囲に、天地は一三㌢、左右は八㌢余と十分な余白がある。ただ字様はやや拙く、巻一第三葉は「三」「三中」「三上」の三葉に、同第九葉は「九」「又九」の二葉になって、末葉の丁付は二九であるが、全三二葉のうちの存三〇葉である。巻二は二八葉。巻四は第一冊尾に第一～三葉が附綴され、第三冊は存第四～二〇葉、以下が欠葉であるが、いずれも料紙が小さく（三〇・二×一九・七㌢）、かなり後印の同版本である。巻一・二には朱筆で句点が施されているが、巻四にはこれがない。

宋刊欧陽文忠公集については、増訂中国訪書志五一二～四頁や同じ著者の天理図書館蔵宋金元版考（ビブリア第七五号　一九八〇年、阿部隆一遺稿集第一巻所収）に詳しいが、この記事と北京図書館善本書目および中国版刻図録図版一四三の解説とを併せみれば、これが少くとも三種あることがわかる。一は宋慶元二年周必大刊本で、北京図書館に三部あるとされる。原本未見のいま、この断定にいささか疑問がないでもないが、版刻図録に「慶元二年周必大倩門客胡柯・彭叔夏等拠衆本彙校、付吉州刻版、吉州即今吉安、世伝吉州本欧集、指此。稍後江西地区又拠此本飜版二次、行款版式悉同、世亦誤認為吉州本」というのは、同年周必大の刊記本が実在するとともに、さらに同館に周必大刊本の他に七部ある宋刻本が二種にわたることを示すものと思われる。第二種として明らかなのは、中国訪書志五六三頁著録の台北の中央図書館蔵の存居士集目録・巻四一～四四

の三冊で、この本もまた李盛鐸旧蔵である。第三は同五六四頁の中央図書館蔵の存表奏書啓四六集巻七一冊等で、二とは刻工も異る者が多く、別版であると明記される。

北京大学本はこの第三本であって、ただ二名の刻工がそれぞれに共通する。蔡懋の名は宮内庁書陵部蔵本（存六九巻）、鉄琴銅剣楼宋本書影（巻一第一葉、存巻一～五〇・北京図書館現蔵）、旧京書影（616）～（621）本の（618）目録第一葉にもみえる。またもう一人の才仲の名も、書陵部本、宝礼堂宋本書録著録本（存巻八二～八四・北京図書館現蔵）にあり、旧京書影（619）巻五五第一葉にもみえる。この刻工名でみれば、これらはみな同じ第三の本となる。なお北京図書館古籍善本書目は、右の瞿氏潘氏旧蔵の二本をただ「宋刻本」として、慶元二年周必大刊本と区別している。

ところで書陵部本の刻工は他に、上官通　江遂　呂桂　呉仲　汪才　況天祐　奇才　胡元　章旺　劉聰　劉忠　蔡賜　東俊　鄧寿　鄧発等であるが、このうちの呉仲と胡元は宝礼堂宋本書録にもあり、また江遂　呂桂　汪才　況天祐　章旺　劉聰　劉忠　鄧寿は、天理図書館蔵の完本（補写三五葉）とも共通する。したがって天理本も同版となりそうであるが、その巻一首葉の刻工は「秉源」であり、字様にも明らかに異るところであって、少くとも鉄琴銅剣楼本とは別版であり、蔡懋の名がみえないから、書陵部本等とも別版のようである。一方で天理本の上官通　官通　程成　陳元　陳全　劉文　鄧仁は、第二種とした中央図書館の存居士集目録・巻四一～四四の三冊にも共通するから、天理本はむしろこの第二に属するものではないか。なお天理本は金沢文庫本、伊藤氏古義堂の旧蔵で、国宝に指定されている。第二、第三の二種は、どちらが先かわからないが、短い期間に吉州で前後して覆刻され、刻工に共通する者がいるのかと思われる。これらの刻工は、次のような諸書も刻しているからである。

呉仲　胡元　　坡門酬唱　紹熙元年序刊　豫章　中央図書館
呉仲　胡元　鄧俊　鄧発　蔡賜
　　呂氏家塾読書記　淳熙九年江西漕台刊　四部叢刊続編
胡元　　韓集挙正　淳熙一六年跋　南安軍刊　大倉集古館
呉仲　　春秋経伝集解　淳熙間　撫州公使庫刊　故宮博物院
胡元　　文選六臣註　淳熙間　贛州刊　宮内庁書陵部　中央図書館（北平）

淳熙（一一七四～一一八九）ではいささかこの本より刊期が早いが、豫章、南安軍、撫州、贛州といずれも江西で、当時は

江南西路に属する。慶元二年（一一九六）周必大の刊刻に次いで、この本も欧陽脩の籍貫の吉州で覆刻されたのであろう。第二の天理本も第三の書陵部本も欠画が敦字までであるから、その時期は慶元以後となるが、ともに二年をさほど隔てることはあるまい。

あとがき

北京大学図書館へは、一九八七年初夏と九一年秋の両次にわたり、まる三〇日ほども日参した。庄守経・郭松年正副館長の歓待を受け、善本閲覧室張玉範主任とともに宋元版の閲覧に格別のご配慮を賜った。編目部の薛晶如氏と日本研究中心副秘書長の李玉副教授（九一年）に、なにかにつけ協力をいただいた。厖大な冊数の出納には、胡柯（八七年）・王培章・王利娟（九一年）の諸氏が労を厭わず当ってくださった。大学中文系・古文献研究所の諸先生方も常に援助を惜しまれなかった。深謝するところである。

翌九二年が図書館創立九〇年ということで、この縁で光栄にも館長からその記念文集（文明的沃土）に寄稿を求められた。

一方、郭氏が昨年（九四年）一二月七日に逝去されたことに、深く哀悼の意を表するものである。